

エコツーリズムと石見銀山の景観保全

林 秀樹

1. 世界遺産としての石見銀山

島根県技術士会研究部会第3分科会（環境・景観）では、2000年と2001年連続して、石見銀山をテーマとして取り上げた。

石見銀山遺跡は平成12年11月17日、国の文化財保護審議会で「平泉の文化遺産」「紀伊山地の靈場と参詣道」とともに世界遺産の暫定リスト登載物件に追加することが決定された。

しかし、石見銀山は平泉や熊野古道で代表される紀伊山地のそれらと比べて、知名度が低く、産業遺跡ということもあって遺跡の保全の度合いが悪いことから、一般の人々に世界遺産として正当に評価されないという危惧がある。また、周辺の自然環境も他の候補地と比較すると、原生な自然や景観に優れた自然が少ないと思われる。

そのため、銀山遺跡が世界遺産として持続的な発展を続けるため、その周辺の景観や環境の保全と活用について調査研究を行うこととしたものである。

分科会では、銀を採掘していた大田市大森町や銀の積出港として栄えた温泉津町を訪ね、石見銀山が世界遺産に指定されたときの問題点について、温泉津町の銘酒「開春」を酌み交わしながら議論を戦わせた。

2. 魅力ある世界遺産となるためには

石見銀山が世界遺産に指定されれば、さらに多くのツーリストが銀山を訪れることが期待される。世界遺産指定の一環として最も効果ある地域振興策である。

しかし、現地を踏査してみると、当地が銀で栄えた時代は100年以上も前となり、遺跡を見てみても、埋蔵物を発掘したものが大部分で視覚的魅力に欠けている。また、地域社会の高齢化も進み、社寺仏閣をはじめとする歴史的建造物も老朽化が著しく、周辺の自然是手入れがされぬまま放置されており、森は荒れ果てている。

分科会の議論の中では、現在の石見銀山は、銀採掘を取り巻く歴史や鉱山遺跡としての価値は高いと認められるが、多様な動機で石見銀山を訪れるツーリストたちの期待に応えることはできないとの結論で一致した。

世界遺産は、文化遺産及び自然遺産を人類全体のための世界遺産として損傷、破壊等の脅威から保護し、保存することを目的に指定されている。文化遺産の保全は、多額の維持管理費用が必要となり、資金調達のため地域が経済的に安定することが必須である。

文化遺産である石見銀山が世界遺産として持続的発展をするためには、多くのツーリストたちが石見銀山を訪れ、その訪問に満足し、リピータとなることが重要となる。

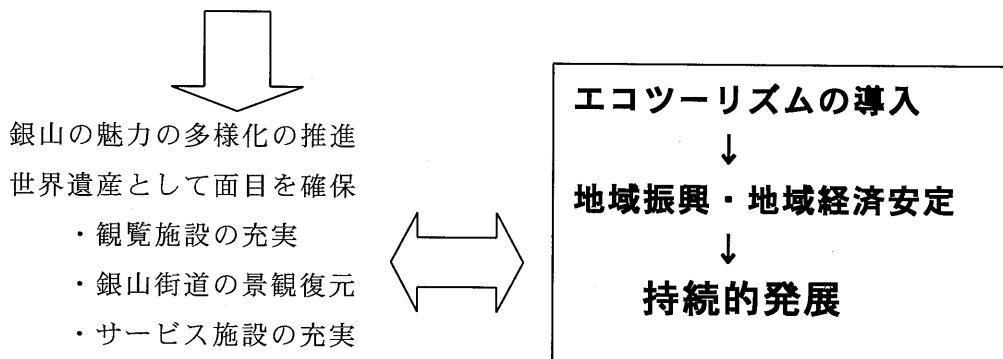
そのための対策として、鉱山遺跡を保全、展示するだけでなく、地域の生態資源を活用し、銀山全域でエコツーリズムを展開する必要があると思われる。

3. エコツーリズム

エコツーリズムは、地域の自然生態資源を活用することにより、地域振興を図り経済を安定させ、魅力ある自然を保全する手法の一つである。中央アメリカのコスタリカなどが取り組み、成功している。

石見銀山において、エコツーリズムを具体的に展開するための課題と問題点をとりまとめると、次のようになる。

- ・鉱山遺跡は、危険で到底訪れることができない狭隘な坑道であったり、解説者(Interpreter)無しでは理解が難しい埋蔵遺跡の発掘跡展示であり、多様なツーリストたちの期待に応えられない。
- ・観光対象となる社寺仏閣を始めとする建造物は、宗教施設であることから公共投資も難しく、老朽化が著しく、このままでは持続的に展示、観覧できない。
- ・休憩、宿泊等の受け入れ施設や売店、レストラン等のサービス施設が著しく不足しているだけでなく、現在ある施設の大部分は施設としてのサービス水準が低い。
- ・銀山周辺の自然資源は豊かではあるが、日常的な維持管理が必要な二次自然(Semi-natural)であり、継続的な手入れが必要である。

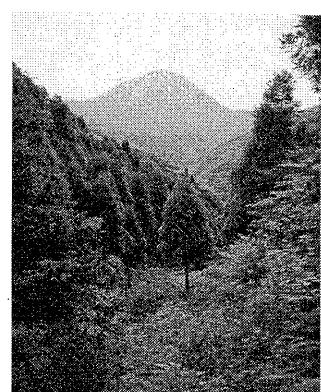


私は、昨年、石見銀山周辺の地域振興の方法としてエコマネー（地域通貨）の導入を提案した。ここでも、銀山が持続的に発展するためには、人々が地域に住み続け、経済的に安定することが重要であることから提案したものである。

3. 銀山街道に魅力

2001年の分科会では、銀山街道を銀山資料館から降路坂を越え、宿場として栄えた温泉津町西田まで踏査した。

街道沿線の景観や環境は、清流沿いの里山を散策したときに体感できる程度のものであり、いわゆる銀山街道を歩いているという満足感とはほど遠いものであった。このままでは、鉱山遺跡やその歴史は世界遺産としての価値があるといわれても、多様なツーリスト達がリピータとなる可能性は低い。



銀山街道降路坂

4. 本草学、山相学とエコツーリズム

エコツーリズムには、地域の自然生態資源の活用が不可欠である。

今回、銀山街道を踏査にあたっては、あらかじめ石見銀山資料館の仲野学芸員から鉱山の採掘や精錬の技術についての講演を聞いてから出発した。

その講演で銀の探鉱術としての山相学、本草学を知り、街道を踏査したことから、景観や自然環境では特色の少ない沿道が、単なる山道からエコツーリズムの対象に変化したことが実感できた。そこで、ここでは、銀山街道と本草学を応用したエコツーリズムを考えみたい。今回取り上げる植物は、ヘビノネゴザとクズである。

本草学や山相学は、現代の博物学や地質学に近い学問である。中国で体系化され、石見銀山が最盛期を迎える江戸時代に日本で最も発展した学問であり、石見銀山の歴史や自然を体感するために適した手法と考えられことから、着目したものである。

1) 銀の指標植物

銀鉱石のあるところにはカナヤマグサやジャノヒゲが生えるという。

降路坂を踏査したとき、時折これらの植物が繁茂していた。少し荒れた街道を歩いている時、もしかしたら、銀鉱石を発見できるかもしれないという緊張感と好奇心が続き、急勾配の遊歩道も楽しいものとなった。

このような環境の総合的な要因の影響を生物で判定する方法は、現在でも環境指標(Bio-indication)として活用されている。銀の指標植物であるヘビノネゴザ(金山草)は、現在では土壤汚染を判定する植物として注目されている。

「銀山街道で銀を発見」ツアーなどを企画する。蛇との出会いを恐れつつ、銀鉱石があるかもしれないと思いシダを観察することは、石見銀山でしか体験できないツアーになることは間違いない。

2) 西田の宿の特産「クズ粉」

銀山街道を踏査する中で目に付くのは、森を荒らすクズの繁茂である。

本草学によれば、クズは家畜のえさとなるだけでなく、根茎からは「くず粉」を採取し、その残りの纖維は、障子やふすま紙の強化のために利用するとされる有用植物である。

金山草

和名 ヘビノネゴザ(蛇の寝御座) 別名 カナクサ(金草)

束生した葉の間に時々蛇がとぐろを巻いていることからこの名となった。別名カナクサは金銀の坑道や鉱石の捨て場などによく茂ることから。(牧野植物図鑑)



ヘビノネゴザ(金山草)

銀山から温泉津港までの銀山街道で唯一の宿場となった西田は、「西田クズ」といわれる、くず粉の産地であった。銀の運搬などで疲れた体にとって、葛湯は元気回復の特効薬となることから、当地で生産されたものと思われる。

現在の西田は、くず粉の生産も行われておらず、宿場町としての往時の面影もなく静まりかえっている。しかし、雄壮な社寺仏閣が残っており、秋の風物詩としての「よづくはで」もあり、エコツーリズムの拠点として位置づけ、ツーリストを呼び込む魅力は残っている。ここで、クズの根からくず粉を採取したり、クズの蔓でかごを編んだりする場を提供することを提案したい。

3) 山相学の宝庫「石見銀山」セミナチュラルな自然を守る

多くの人々が暮らした銀山周辺は、自然の恵みを活用するため、人々が暮らしやすいよう人間の手を加えたセミナチュラルな自然が特徴である。

銀山に暮らす人々は、信仰の対象となる社寺仏閣ではシンボリックな森を守ったが、その他の森では、生活に関連する材木、燃料はもとより、薬用になる様々な植物を採取していた。資料館にも薬草箱や薬草を加工する道具が展示されている。健康志向が高まる昨今であり、薬草をさがす自然探索ツアーも銀山の地域資源を活かしたエコツーリズムの一つとなると思われる。

5. 世界遺産としての持続的発展

石見銀山は、世界遺産登録までにまだ多くの難関があると思われる。

それ以上に世界遺産として登録した後、石見銀山が世界遺産としての風格を維持し、持続的発展を続けるための仕掛け作りの方が大変だと考えている。

中高年の登山ブーム続いている昨今の状況は、健康と自然とのふれあい指向の高まりから派生しているものと思われる。

石見銀山は遺跡の特徴から考へても若者より高齢者のツーリストが多く訪れると思われる。健康と銀発見のチャンスを秘めた歴史探訪と自然散策を楽しむための方策としてのエコツーリズムは、銀山遺跡の魅力を多様化できる手法の一つとなるであろう。

現地を歩いてみると、世界遺産登録時に多くのツーリストの来訪を夢見て、個性的な店づくりが始まっている。地域振興に寄与でき、経済的に効果のあるエコツーリズムとして成功させるためには、彼らと連携した魅力作りをさらに深めていく必要がある。

石見銀山エコツーリズムメニュー

- ・多様な好奇心をくすぐる
- ・歴史を体感
- 鉱山遺跡を散策
- 社寺仏閣を訪ねる
- ・健康志向
- 山相学、本草学
- 銀の探鉱術
- そばなどの健康食材